



医者嫌いと呼ばれる方々がいます。家族が医者にかかるように説得しても、苦しい症状を我慢しながら受診を頑なに拒むような人たちです。医者立場から言えば、医者の方が

好きで好きでたまらないと言われるよりも、気分的に楽です。そもそも成人患者の場合、治療を受けるか否かは人生の中で培ってきた価値観に基づいて、本人が決めればよいことです。ところが昨今はそのように本人の自由意思に任せることが出来ない時代になりました。例えば産業医学では、社員の皆様の健康を守ることが法律上安全配慮義務と称されて、会社が負うべき義務となっています。つまりそれを怠る会社は、法律違反の犯罪組織になってしまうのです。したがって産業医は皆様に対して、不快な小言をチマチマ言い続けなければなりません。医者嫌いの方々には勿論のこと、医者にとっても住みづらい世の中になりつつあります。

近代思想家の中に、恐らく医者嫌いだったと想像される人物がいます。代表作『ツアラトウストラ』で有名なドイツの思想家ニーチェです。彼は本来は古典文献学が専門だったため、いわゆる一般的な哲学者のようなまどろこしい表現は使用せず、時に下世話な言葉を用いる力強い語り口が特徴です。ニーチェはプロテスタントの家庭に育ちました。しかし古代ギリシアの時代から西洋思想が前提としてきた形而上学に反発心を抱き、キリスト教を一方的に毛嫌いしていたようです。著作のあちこちでキリスト教に対する批判的な表現が展開されていますが、注目したいのは『権力への意思』（ニーチェ全集）の中に見える「キリスト教の藪医者道徳」という表現です。この言い回しは、体調が不安定で医者との関係が切れなかったニーチェが、日頃から医者好ましく思っていなかった証左と受け止められます。

ニーチェが医者に期待するのは、「病氣自身についてよりも病氣に対するその思想について、より多く苦しむことがないように、病人の空想を鎮静すること」（『曙光』）でした。ところが実際は、医者は患者を脅すような理屈しか言わないと非難します。一方で患者は弱者であるため、機嫌を損ねないように医者顔色を窺わなければなりません。「自分にかかる医者にむくよう生まれていなくてはならぬ。さもないとその医者のために命を落とす」（『人間的、あまりにも人間的』）

とは、患者のそのような哀しい立場を指しています。そして医者存在を「忘れた人は健康だとさ」（『悦ばしき知識』）とまで言うのです。「医者のかせこせした忠告やこの上なく厄介な暮らし方でもって一日一日を生きのびようとする病的欲望は、ずっと尊敬できないものである」（『人間的、あまりにも人間的』）が彼の本音ではないにしても、この前半の表現こそ彼の医者観だったのでしょう。

医者ってどうして小言ばかりを言うのでしょうかね。貝原益軒の『養生訓』などは、「こせこせした忠告やこの上なく厄介な暮らし方」ずばりそのものだと思います。人の生命はどう頑張ってもせいぜい百二十年。どんなに健康に気を配っても、いつか病いに倒れることは必至なのです。それなのに医者は卵を食べるなどか酒を減らせなど、次々と人生に本質的でないことを並べ立てます。そのような狭小な人間観を、省みることなく確信している辺りに、医者学の狭さが露呈されているように思えますね。ニーチェが述べる「医者よ、きみ自身を救え。そうすればさらにきみの患者をも救うことになるだろう」（『ツアラトウストラ』）とは、医者自身その方法論で人間的苦悩を超越できるのかという挑戦的な問い掛けでありましょう。私はニーチェの意見に賛同します。ただニーチェが牙をむけばむくほど、医者との関係を絶てないでいる彼の苦しい想いも察せられてくるのです。

昭和の禅僧、関大徹氏の著作『食えなんなら食うな』が復刻されました。本書には彼独自の達観されたお考えが列挙されています。題名については、「食えなんなら飢えるのであり、飢えれば、死ぬまでである」と明快です。実はこの方、生前に胃癌を克服されていますが、「私は、ガンという手段で死ぬはずであった。その手段が医師によって截（き）りとられた…それだけのことである。私は、つぎの手段を待つ身になったにすぎない」と平然と語り、「病いなんて、死ねば治る」との由。恐らく彼には病いなど比較にもならない、重い人間の課題があったのでしょう。ニーチェは、理想像とかけ離れた医者姿に憤りました。しかし自己決定権が薄らいでいる現代社会においては、医者嫌いが医者に対決姿勢で挑むと、ご本人の説得力は逆に弱まりそうです。むしろ大徹氏のように、医者小言などお呼びでない境地に至ること、すなわち医者いらすを目指すのが賢明なのかもしれません。